

バニルさんごっこをしたい人生だった

西瓜最高

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

思いついた一発ネタ。

グロ的な意味で18禁にしたい。

目次

バナルさんごっこをしたかった人生だった

## バニルさんごっこをしたい人生だった

それはまるで世界が変わったかのようだった。

天は虹色に輝き、竜が飛び、襲い掛かる。

地は割れて、魔物が溢れ、襲い掛かる。

人は怯え逃げ惑い、食い殺される。

まさしく今、人間社会が、人類にとっての世界が崩壊したのだ。

などと思わず格好付けてみたが、実はそんな余裕はない。

なんせ今、まさに目の前のドラゴンに食い殺されそうだし。

というか現在進行形で母さんが食い殺されてるし。

どうやら母さんが最後の悪足掻きでボールペンを目に刺したお陰でドラゴンは随分と腹を立てたようで、それはもう暴れ回っている。

具体的に言うと、家の一階の居間の壁を突き破って入ってきたドラゴンが母の左半身に噛み付いて振り回して、叩き付けて踏み潰したせいで頭や内臓などが飛び散っている。誰が見ても即死だと分かる。

もはやミンチのような有り様で、飛び散った血が顔につき、ついへたり込んでしまった。

：母はなんだかんだで俺の我儘を聞いてくれたし、妹が言い忘れた急な用事にも文句を言いつつも手伝ってくれた。

そんな母のことが、少なくとも嫌いではなかった。

「は、」

だというのに俺は、

「は はは」

その光景に思わず

「あっははははは、ははは」

それはもう悔し<sup>樂</sup>しそうに笑ってしまった。

「はは、…嗚呼、くそ」

この状況で思わず、恐怖でも怒りでも悲しみでもなく楽しさを感じるとは、自分の性根の悪さに思わず笑いが込み上げてきた。

あ、思わず笑ってしまった訳だが…

そうなれば当然コイツに気付かれる訳で、母を食っていたドラゴンがこつちを見た。

(まあ、気付くよな)

…さて、このままへたり込んでたら確実に食われて死ぬ。

自殺する手間が省けるので別にいいのだが母さんが竜の目を潰すという結構凄い事をしたのに、自分はただ食われるというのは悔しいというか、少し申し訳ない。

となると…

(もう片方の目でも潰そうか…)

逆鱗を殴るのもいいが、位置的にもう少ししやがんでもらわないと当たらないな。

ううむ、これはやはり噛み付かれた瞬間を狙うしかないか…？

そう思つて足元を見ると、二階の俺の部屋に置いてあつたお手製バニル仮面と黒鍵のレプリカが落ちていた。

懐かしいな、部活動の暇な時間に作つたんだよな、これ。黒鍵の方は誕生日プレゼントに妹がなぜか買ってきたやつだよな。

でも妙だな、これちゃんと二階の机の中に仕舞つたのになんで一階の居間に落ちてるんだ？

「グウウウウウ…」

…気にする余裕はなさそうだ。

まあいいか。

ボールペンで刺せたのだから、レプリカとはいえ黒鍵あれで奴の目を潰すことはできるだろう。

やっぱり奴が噛み付く瞬間に黒鍵を刺せばいいという事だ、分かり

やすい。

それで良い、それで終わりだ。

そうして俺は黒鍵を拾おうとした。

ただ、何故だろうか

俺はどうしてか、この仮面から目が離せなかった。



ドラゴンはその男に喰いついた、はずだった。  
だがそれにしては噛んだ感触がないのは一体…？

「ほう、これが逆鱗か」

——その瞬間、首の下に強烈な不快感と共に痛みが走った。

思わず頭を引っ込めたドラゴンはその痛みが何かを理解した。  
逆鱗に触れた、

否、逆鱗を剥がされた?!

「フム、やけに力が漲るな。喉の調子も体の調子も絶好調ときた、…これは俗に言う“灯滅せん”として光を増す”か？竜の鱗も剥がせるとは、我輩もまだまだ捨てたものではないな」

ドラゴンは声が出した方を見ると、そこには口元が開いた仮面を被った男が、手に”鱗”を持っていた。

——貴様か！

ドラゴンは怒りに身を任せて火を噴く。

咄嗟にテーブルをひっくり返して炎を防ぐ。

その時、仮面の男にはそのドラゴンの聞こえぬはずの思いが聞こえた。

——ただでは済まさぬ

「ーっじつくりと引き裂き、焼き、叩き潰して、

「ーっ苦痛と恐怖と共に貴様を食い殺してくれる!!」

まさしくそれは、怒りの咆哮だった。

男は何故こいつの心が読めるのかと疑問に思ったが、気にするのをやめた。少なくともこのドラゴンがかなり苛立っている事は理解できたので、なら良いか、と納得した。

「炎を吐くか、いよいよドラゴンらしくなってきたではないか」

ドラゴンは爪でテーブルを引き裂いて、後ろのテレビごと貫いた。

男は横に身体を逸らして躲したが、僅かに脇腹を抉ってしまった。

「ぬう。貴様、今壊したテレビは結構値が張ったのだぞ」

軽口を叩く男へと爪を横薙ぎに払う。

男は後ろに仰け反ってそれを躲し、そのままバク転して後ろに下がるが、丁度そこにあった柱に背中をぶつけた。

「まったく、我が家の物をそう軽々しく破壊するでないわ。特に、」

そして男を今度こそ食い殺さんとばかりに噛み付くが、そう来ると解っていたかのように男は既にしゃがんでおり、柱だけに噛み付いてしまった。

「そう、特にその柱とかな。それを壊されると結構困った事になる、何せそれはーっ」  
ぱきり、

知ったことかと返答するかのように、その柱はあっさりと砕かれた。

「ーっそれは、大黒柱だからな」

「ーっぱきり」

そんな音が壁中から聞こえると共に、一瞬で家は崩れた。



「よもや生き残ってしまおうとは、我輩も存外にしぶといな」

倒壊した家の残骸は、ドラゴンの上半身と仮面の男を容易く飲み込んだ。

そして男は上手いこと瓦礫に押し潰されずに生き埋めになり、なんとか這い出てきたのだ。

「さて、あの竜は…」

埋まっているのは半分だけか、あの巨体では仕方あるまい」

ドラゴンを見ると、崩壊した家の残骸によつて下半身以外が見事に埋まっている。それはまさに「頭隠して尻隠さず」と言わんばかりの格好になっている。

よく見ると尻尾が微妙に動いているため、別に死んでる訳ではなさそうだ。

実際の所ドラゴンには余りダメージは無く、何があったのか理解が追いつかずフリーズしているだけだ。所謂頭の中が真っ白になったわけがわからないよ状態である。

(にしても、ここまで上手く行くとはいわなかったな。逆鱗殴るのが精々だと思つたが…)

男は、少し前の事を思い出した。

(バニル仮面。パワー凄え)

あの時、彼は唐突に「どうせならバニルさんごっこしながら死にたい」と思って本当に仮面を被ってしまった。

そして噛まれる直前に思い付いた。

”これ上手く避ければ逆鱗行けるな”

とてもでは無いが彼の身体能力では不可能な事を、この時彼は何故か出来ると確信していた。

本当に出来てしまった、殴るところか剥ぎやがった、これにはドラゴンもぶっ殺つこりである。

そして当の本人は少しパニックになっていた。何せ急に声がc v西田つぽくなったり身体能力がめっちゃ上がったかと思えば相手はどう動くのか分かる様になったり、相手が思っている事が伝わってき



たりとかなり混乱していたが、彼のコスプレ中はキャラを演じ切ると  
いう執念で何とか誤魔化した。

その結果、逃げるという発想を最初になんぐり捨てているこの男  
は、壊されていく家を見て“どうせなら自分諸共生き埋めにしてくれ  
る”という自爆上等な考えに至ったのだ。

これでこのドラゴンを殺す事は出来ないだろう。だがそれがどうし  
た、今の俺はバニルさん、ならば最後まであいつの“嫌だな”という  
感情を引き出すだけだ。

その結果がこの有様だ。

回想を終えた男は、ドラゴンの下半身を見て「尻穴に角材でも刺す  
か」と呟いた。馬鹿じゃねえの

もはやバニルさんというかアクシズ教徒じみた嫌がらせを思い付  
いた男は、丁度いい大きさの角材を探し始め、ドラゴンから目を離し  
た。

——その瞬間、瓦礫が思いっきり爆発した。

それは決して意図して起こした事ではなく、偶然だった。

やっと理解が追いついたドラゴンはそれはもうキレていた、そして  
鬱憤を晴らすかのように思いっきりブレスを吐いたのだ。

そして爆発により瓦礫が吹き飛び粉塵が舞い上がり、周りが見えな  
くなってしまう。

しかも粉塵が目に入って痛い。

「ぬう……」

思わず粉塵から目を守るために腕で顔を隠した。

だがそのせいで視界が塞がってしまい、その爪攻撃に反応するのが遅  
れ、腹が裂けた。

「ぎゃー」

咄嗟に飛び引いたため両断こそ免れたが、かなり深く抉れてしま  
い、腹から腸などの内臓が零れ落ちた。

「ぐ、ぐう…」

それでも何とか倒れぬよう踏ん張って、ドラゴンを見た。

G A a !!

その咆哮を聞いて、自身の挑発によって凄まじい程の殺意を抱いている事を感じとり、男は「自分はちゃんと相手の嫌がる事が出来たのか」と安心した。

(ここまでやれただけ十分か、なら最後は…)

男は端から生き延びる事など考えてない、そんなこと世界が崩壊する前から諦めている。

そしてこれ以上嫌がらせするにしても、この傷でやるにはなかなか難しい。

ならば、最後まで演<sup>パニルさんごっこ</sup>技をするだけだ。

(最後の一言、パニルさんの決め台詞…！)

「フハハハハ、下等生物にコケにされた汝のその憎悪の悪感情、誠に美味である！」

ドラゴンの咆哮に掻き消されぬよう、大きな声で言い切った。

そして男は、いやあパニルさんごっこ楽しかったなあ、と言わんばかりに満足そうな顔をしていた。

(満足だ。やり残した事はもう何もない)

ドラゴンが次のブレスの準備をしているが、彼はもうこれっぽっちも気にしてなかった。

そして、ブレスを放とうとしているドラゴンに向けて、自分<sup>演劇</sup>の人生に終わりを告げるかのように一礼をしてー

「たわけが、何を勝手に終わろうとしておる」

「……その声に思わず顔を上げて眼にしたのは、何百もの銃声音が響き、ドラゴンがあっさりと倒された瞬間だった。」

「……………」

彼はその光景に、

いや、その光景を創り出した者に目を奪われた。

「よもや死の間際まで阿呆を演じるとは、我がマスター乍ら、とんだうつけじやのう」

その余りにも強烈な彼女の後ろ姿にもはや彼は見惚れていた。

竜を圧殺する絶大な力？ 絶世の美女？ ゲームで大切に育てたキャラクター？

否、もはや其れ等は彼女を語る物の一つに過ぎない！

「だが此処で死ぬなど許さぬ、言った筈だぞ？ そなたと儂は一心同体。これより我ら二人、天下布武の始まりだとな」

視えたのだ。

燃える世界、がしや髑髏のような巨人、

そして、幾万もの骸の上に立つ、紅蓮の炎を纏った王を。

彼の眼には、魔王の幻影が映っていた。

「とは言え、この世界で会うのはこれが初めてであったな。であれば、改めて名乗ろうではないか」

そして、此方を向いた魔王から感じる世界を焼き尽くすと言わんばかりの”熱”に、もはや先程までの満足の余韻など消し飛び……

「我こそは！ 第六天魔王こと織田「とーう！」ノブウ?!」

——急に出て来た純白の花嫁が魔王の頭にとても鮮やかに着地した。勢い余って魔王は頭から地面にめり込んだ。

「…え、」

余りの展開に色々ぶっ飛んだ。

魔王が現れたと思ったら花嫁が踏んづけてた。もうわけわかんねえ。「うむ！先の闘いは見事であった、欲を言えばあのまま華麗に勝って欲しかったが…まあよい、ドラゴンに怯まず挑んだその雄姿、確かに見届けたぞ！」

サーヴァント、ブライド！其方の花嫁である！さあ！思う存分に構うが良い！」

血を流し過ぎたせいか段々と意識が朦朧としてきた彼は、ベッドに飛び込むように地面に倒れた。

「ぐだぐだア…」

そして彼は力尽きて気を失った。